

知的障害者におけるスポーツ活動参加の現状と課題

－インタビューによる事例研究－

鍋 谷 照・栗 原 拓 也

An Interview Survey on the Current Situation and Problem for Sports Activities of Intellectually Disabled Person

Teru NABETANI and Takuya KURIHARA

はじめに

知的障害を有する人々の余暇活動について、学齢期を過ぎると休日などの余暇時間にテレビを見るなど、家にいることが多くなり、人との関わりが少なくなること¹が言われている。また、自閉症者においても、保護者の高齢化により、子どもとの外出が困難になり、家に引きこもりがちになること²などが指摘されている。

石黒ら³は、親の会に所属する成人知的障害者の保護者を対象にヒアリングを行っている。概要としては、知的障害者たちの保護者としては、外出に積極である人たちが過半数を占めているものの、活動参加時に母親依存の傾向があることを指摘している。そして、公共施設の利用はあまりされておらず、現状の公共施設は利用しにくいと感じていることを報告している。

また、郷間ら⁴は、通所授産施設に就労する知的障害者本人に、余暇活動に関するインタビューを行っている。その内容は、多くの人たちが現状について満足しているが、ガイドヘルパーなどの情報については、ほとんど知らない状況であった。そして、外出はほぼ家族同伴であり、友人との関わりは少ない傾向があったと報告している。

近年、障害者の生涯学習を充実させるために、大学の資源を活用しようとする試みがある。いわゆるオープンカレッジである。

西村⁵によれば、国内初の知的障害者のための生涯学習の場は「すみだ教室」であったという。このすみだ教室は、中学校や特殊学級を卒業した者の精神的安定と支えの場として開催されていたという。のちにこの活動は障害者青年学級と名称を変更し、参加者の主体性に重きを置いた活動にシフトする。時を経て、大学を舞台とした生涯学習が1995年に東京学芸大学で行われる。この取り組みが、学生や市民にも拡大し現在の「オープンカレッジ」へと変化したという。知的障害者の生涯学習の場が、養護学校の卒業生を対象とした養護学校の教師による青年学級の形態から、共同の学びという質的变化を伴い、今日のオープンカレッジへと変化している。

オープンカレッジの理念としては、「知的障害者の人権(教育を受ける権利)の保障」、「知的障害

者の変化（発達）の可能性の保証」「地域社会に対する大学の貢献」の3つが掲げられている。そして、「大学で開催される」「大学教員が講師を担う」「大学生と共に学ぶ」という3つの特徴がある。

このような取り組みが徐々になされているものの、現状においても知的障害者の活動の場は充実しているとは言い難く、障害児の保護者を対象とした調査⁶によれば、学外での活動についての質問に、「ほとんどいつでも自宅で過ごす」と9割を超える回答があったとの報告がある。確かに、保護者達は子どもたちの放課後の活動が豊かになることを望んでいる。しかし、8割弱の保護者が児童クラブの存在を知っているが、通っていると回答した者は7.2%と1割にも満たない。そればかりか、「通いたくない」と回答した者も36.0%いる状況がある。

加えて、松本と郷間⁷は、軽度知的障害者の学校卒業後の余暇について実態調査を行い、地域のサークル・スポーツクラブ・行事やイベントなどに「よく参加する」人は4.9%、「時々参加する」人は23.2%、「まったく参加しない」人は72.0%であったと報告している。

このように、当事者や保護者など関係者は、余暇活動の充実を望んでいるにもかかわらず、その内容は、就学期においても充実しているとは言い難く、その状況は、就学期を終えて更に悪くなっているようである。

先行研究では、就学期を終えると余暇活動が減少するため、家庭に引きこもる傾向があるという。それでは、学齢期を終え授産施設などで就労をする生活に移行した場合、どのようなことが影響して、余暇活動が減少するのであろう。その要因を確認することで、知的障害者の生活改善の手立てが得られるのではないかと考えられる。

そこで、本研究の目的は、就学期を終えた知的障害者の余暇活動参加の要因を確認する事である。特に、就学期を終えた後の余暇活動の内容の変化を保護者からの聞き取りを通して、確認を試みる。

方法

1) 対象者

インタビューの対象者は、知的障害者のためのオープンカレッジにおけるスポーツ教室（テニス）参加者の父親（57歳）である。当事者は障害者手帳A（IQ35以下）の保持者の男性であり、スポーツ教室に参加するようになって3年経過している。父親は知的障害者を雇用する特例子会社に勤務している。テニス教室の活動には、一緒に活動に参加してくれており、障害者と接することについては慣れている。

2) データ収集方法

本研究において、データの収集には半構造化インタビューを実施した。半構造化インタビューでは、ある程度の構造化を施しつつ、興味深いトピックや語りなどについて適宜質問を加え、インタビューの反応を確認しつつ、柔軟にやり取りを進める方法である。

3) インタビューガイド

次の内容を中心にインタビューは展開された。

(1) 対象者の属性や経歴

- ・家族構成やご兄弟などはどのようなになっていますか。
- ・出身学校やその時のクラブ活動などに参加していましたか。

(2) 活動に対する感想と要望

- ・テニス教室に参加してどのような感じでしたか。
- ・テニス教室に対して要望はありますか。
- ・その他のスポーツなど、今後やってみたいことはありますか。
- ・生涯学習やスポーツの果たす役割は？

(3) 社会とのつながりについて

- ・現在の友達などの交友関係はいかがですか。
- ・地元でスポーツなどに取り組みことはありますか。
- ・高校卒業してからの交友はどのような状況ですか。
- ・当時の友達たちと会うことはありますか。

(4) 余暇活動について

- ・現在、近くでスポーツ経験できる場はありますか。また、そこではスポーツを選択できますか。
- ・日常の中で楽しいことや、趣味や娯楽などがありますか。
- ・習い事の体験はありますか。
- ・日常における休日の過ごし方はどうですか。
- ・家族で外出することなどはありますか。

(5) 現在と就学時の環境の違いについて

- ・就学当時と社会人になってからのスポーツ体験の違いはありますか。
- ・就学当時と社会人になってからの 保護者が得られる情報などの量や質に違いを感じますか。
- ・就学当時と社会人になってからの交友関係について違いはありますか。

インタビューは、対象者の許可を得て、OLYMPUS IC レコーダーWS-805を用いて録音した。インタビューの時間は1時間弱であった。データの収集は2016年12月11日に行った。

4) データ分析の手順

データ分析の手順は、インタビュー内容を逐語記録に起こしてから、切片化を行った。切片化の主要ワード間の構造を、KJ法にて分類・結合を試みた。記録を読み込み、就学期を終えた知的障害者の余暇活動参加の要因を確認する事を目指し解釈を行った。

結果

今回の逐語記録からエピソードを起こし、項目の分類と結合を行った。本報告では、就学期を終えた知的障害者の余暇活動参加の要因を確認するべく、まず、就学時と卒業後の余暇を通じた交流について確認をした。そして、インタビューを通して確認できた事柄の項目間の関連を探ることとした。

以下、論文中で斜字体にて示してあるコメントは、インタビューによる父親の逐語記録の部分抜粋である。記録番号は、逐語記録の際、内容の固まりごとに冒頭から割り振った通し番号である。また、両かっこ内のコメントは質問の内容及び補足である。

1) 就学期を終えている今の余暇活動の現状について

「うちの小僧は卒業後もいろいろな付き合いがある方なんだけど、1つはサッカー。あとは、育成会の関係。てんかん協会の関係。そういったやつにも入っているんで、そこでのこの、ボーリング大会とか。あとその音楽会とか。今日もそれで行ってる。案外とそんなのに積極的に携わっている方なので、あいつはまだ、それがある方だと思いますよ。ない奴は全くないですよ。」－記録番号【3】

「(今の育成会などのつながりを持っているか、持っていないか) それで決まっちゃうと思う。」－記録番号【4】

これらのコメントから外部組織のつながりの有無が、コミュニティ形成に影響していることが伺える。

「きっとそうでしょうね。親のスタンスだと思いますよ。社会人からいきなりやるというのも難しいでしょうから、彼らが学生時からやっていかないと、なかなかすんなり入っていけない。だからやっぱり、親のスタンスだと思いますよ。」－記録番号【36】

「(就学していたときにそのネットワークを作らなかった、作れなかった人は、成人したときに、そのネットワークは皆無になってしまうって可能性がある) なると思う。」－記録番号【38】

組織的つながりを持つことに対して親のスタンスが大きい影響を持ち、成人前にそのネットワークの形成があるかどうかが重要であることが伺える。

上記のコメントから、人間関係が親のスタンスに依存していることが伺える。

2)「親の関与」について

「普通の子よりレベルがちょっとあれ（知的レベルが低い）っていう。Y（息子さんの名前）ぐらいまで行けば、まだそうでもない。女の子に話はするけれど、それ以上のことはそんなにできない。それ以上の（能力の）子っていうのは、普通の男性と同じことが出来ちゃうから。ああいったことまでやって、子どもができて、責任は取れないよというのはいっぱいあるから。その前に、どうやって制限するかっていうのが。あの世界って、すごく限られた世界なんで、そのくらいのレベルのことが出来るやつっていうのはスーパーマンなんですよ。だからもう、ほんとにもて放題。Yがもっと頭が良くて、スポーツ出来たら、あんなに話せるから、それだけで、もうスーパーマンなんです。それ、そのことをいいようにやっちゃっている奴なんて、いくらでもいるんで。そういうやつらは、名指しで注意するし、親を呼び出すんですよ。そういった動きがありそうな場合は、女性の方に（伝えて）、結局女性が自分で身を守るしかないんだよね。」－記録番号【22】

このコメントから、知的障害者の内部においても、その能力差によって階層構造が構成されていることがわかる。

「1つの柵を作ってくれればいいんだけど、そうじゃなくて、例えば、養護学校の卒業生で、結構頭の良い軽度の子って、結構いろんなところで遊んじゃってて、色々なところで会う。うちの子がね。向こうがね、その時に（メールを）交換して誘ってくれるんだけど、誘ってね、結構、ろくなことが起きないんですよ。お金の問題であったり。逆に、そういったやつらと仲良くなっちゃって、あまりよくないやつらだとしても、そこで関係をいったん持っちゃうと、それをやめなさいというのが難しくなっちゃう。」－記録番号【28】

知的レベルの違いによって実害をこうむるため、関係をつくと困難を抱える可能性のあることが伺える。

「そうすると、なんかしらの方法でふりをかけていると言っては語弊があるけど、チェックされた集まりであれば安心はできるけど、知らない人というんじゃ（交友を）開かないですね。それはね、作業所の奴らはそういうのが多いと思う。ただ、それが特例とか一般就労している障害者の方っていうと、そんなことはないと思う。それまで、レベルもっと高いから。でも、そういう奴らが悪さするパターンが多いから。」－記録番号【30】

知的レベルに違いがあるため、レベルの高い者は低い者に対して悪しき影響を与えてしまうこと

がある。そのため、親はチェックされた集団であれば安心できると考えていることが伺われる。

3) 親のジレンマ

その一方で、親の立場からのジレンマも感じさせるコメントがある。

「はびねす（本学のオープンカレッジ）さんがあったり、サッカーのやつ、高校時代のあれとか、てんかん協会の波の会とかがあったり、1つのグループの中に入っていないと、そういったところに行かないんですよ。このようなグループに入っていない人は、アプローチすることもできないから、そういったのが公の公的機関であったり、例えば大学の方でも何でもいいと思うんですけど、そこが、組織に入らなくてもできますよっていう、そういったアンテナ（おそらく情報発信の意味）を発することができれば、入りやすいかも知れない。」－記録番号【23】

グループに属しないとネットワークが成り立たないが、新しいグループに入るのには抵抗もあるというようにも受け取れる。

「その後ね、一対一で連絡を取ってっていうのは、その所までの能力がYにはないんですよ。それと、そういったのが怖いっていうのがあって、親の方も、抑えちゃっているっていうのがあります。あそこである程度、Yよりもレベルの高いやつ、メールの交換をしたりとか、そうすると輪が広がるんだけど、意図的にそういうのはダメだってこちらの方が、教えている。親がそこに入っていないと、基本的には広げられないんですよ。彼らを信じていないわけじゃないんだけど、広げちゃうというんなパターンが出てきちゃうから。基本的には、教えないです。」－記録番号【26】

息子のネットワークが広がることに対して、親の立場から見た外部との関わりをもつ怖さと親による制限をかけていることに対するジレンマを感じさせる。

「新しい人は入っていけないし、それで、僕らは育成会の仲間とか、波の会の仲間というのは安心して、要するに、さっきのメール交換じゃないですけど、その中ではやり取りするけど、それに入っていない奴は遮断するよと。そういう形で、僕らは防御策を作っている。また違うところで、そういったものがあるのであれば、また、メール交換できるとかね。」－記録番号【39】

安全のための防波堤づくりが新しいネットワーク作成の足かせになっているとも言える。

考察

今回のインタビュー結果から示されたことは、本事例において、学齢期を過ぎて余暇活動が少なくなっているという傾向は示されなかった。余暇の充実の度合いは、親がどれだけネットワークを構築することに積極的であるかに依存しているようであった。

先行研究に示されるように、学齢期を過ぎてから不活発になり、かつ、保護者の高齢化によって外出が困難になることは考えられるであろう。例えば、郷間ら⁸のインタビューによる研究では、通所授産施設に就労する知的障害者本人は、ガイドヘルパーなどの情報については、ほとんど知らず、外出はほぼ家族同伴であり、友人との関わりは少ない傾向があったと報告している。

また、石黒ら⁹が報告するように、活動参加時に母親依存の傾向があり、公共施設の利用はあまりされていないことは、親のスタンスに依存する可能性がある。

このように、外部とのつながり、つまり、社会的ネットワークは親のスタンスに依存するので、当事者が就学期のうちに、親の会などのネットワークを構築しない限り、当事者は人的な関わりの外におかれてしまう可能性がある。このことは、本報告のインタビューからも確認できたことである。

また、今回のインタビューによって確認できたことは、知的障害者の中に階層構造があり、その中でも、人間関係を作り上げていくことに対する親の警戒心があるということである。親の立場としては生活が豊かになることを願っているが、人間関係の広がり、知的能力の低い側に不利な関わりを作り上げてしまうこともあり、保護者は制限を求めてしまうことがあるという。これは、自ら高齢になる前に人間関係を構築したいと考えるものの、その可能性に対して警戒感を抱いているという、ある種のジレンマであるのかも知れない。

松本と郷間¹⁰によれば、軽度知的障害者の学校卒業後の余暇において、地域のサークル・スポーツクラブ・行事やイベントなどに「よく参加する」人は4.9%、「時々参加する」人は23.2%、「まったく参加しない」人は72.0%であったと報告している。地域のサークルは知的障害者に開かれていないと考えられても致し方のない数字であろう。

就学期を終えた知的障害者ではなく、就学中の子どもたちの学童クラブに関する調査では、「通いたくない」と回答した保護者は36.0%であった。この調査では、知的障害以外の障害も含まれており、知的障害者の割合は44.4%であった。障害別のクロス集計がないので詳細はわかりかねるが、障害の種別、程度による階層構造が生じていることが一因とも思われる。

これらの研究の結果から、保護者は学外での生活が豊かになることを願っているが、同時に交友の範囲を広げることに警戒感を示している表れなのかも知れない。

常に保護者が干渉をせねばならない要因として、障害者内の階層構造があるとするならば、保護者が人間関係に懸念を抱くことがない余暇活動の場を提供する必要があると思われる。もちろん、一事例で全体の傾向を示すことにはならないため、本報告では一要因として考え、今後、継続的に確認することを課題としたい。

要旨

本研究では、就学期を終えた知的障害者の余暇活動参加の現状及びその参加要因を確認するために、保護者に対してのインタビュー調査を行った。特に、就学期を終えた後の余暇活動の内容の変化に着目して保護者からの聞き取りを試みた。

インタビューの対象者は、知的障害者のためのオープンカレッジにおけるスポーツ教室（テニス）参加者の父親である。当事者は障害者手帳A（IQ35以下）の保持者であり、スポーツ教室に参加するようになって3年経過している。

今回のインタビュー結果から示されたことは、本事例において、学齢期を過ぎて余暇活動が少なくなっているという傾向は示されなかった。むしろ、余暇の充実の度合いは、親がどれだけネットワークを構築することに積極的であるかに依存しているようであった。

更に確認できたことは、知的障害者の中に階層構造があり、その中でも、人間関係を作り上げていくことに対する親の警戒心があるということである。親の立場としては生活が豊かになることを願っているが、人間関係の広がりや、知的能力の低い側に不利な関わりを作り上げてしまうこともあり、保護者は制限を求めてしまうことがあるという。これは、一般に親の立場として、自ら高齢になる前に人間関係を構築したいと考えるものの、その可能性に対して警戒感を抱いているという、ある種のジレンマであるかも知れない。

これらから、保護者は学外での生活が豊かになることを願っているが、同時に交友の範囲を広げることには警戒感を示している表れなのかも知れない。

常に保護者が干渉をせねばならない要因として障害者内の階層構造があるとするならば、保護者が人間関係に懸念を抱くことがない余暇活動の場を提供する必要があると思われる。もちろん、一事例で全体の傾向を示すことにはならないため、本報告では一要因として考え、今後、継続的に確認することを課題としたい。

付記

この研究は2016年度静岡英和学院大学共同研究の助成を受けている。

¹ 安井友康(2000), 地域で自立生活を送る知的障害者の健康と生活習慣, 北海道社会福祉研究, 第20号発達障害白書

² 吉松靖文(1997), 自閉症者の余暇活動に関する研究－余暇活動の実態調査－愛媛大学教育学部障害児教育研究室紀要

³ 石黒久美子, 中村攻, 木下勇(1999), 知的障害者の余暇生活環境整備に関する基礎的研究－知的障害者の余暇生活行動の実態把握とその規定要因の分析－, 千葉大学園芸学部学術報告, 53,

39-45

⁴ 郷間英世，藤川聡，所久雄(2007)，知的障害者の余暇活動についての調査研究－通所授産施設に就労している人を中心に－，奈良教育大学紀要，56，67-70

⁵ 西村愛(2014)，社会は障害のある人たちに何を期待しているか，あいり出版

⁶ 恒次欽也，森本尚子，日暮眞(2000)，障害児の放課後児童健全育成(児童クラブ)に関する調査研究Ⅱ－保護者調査の結果概要－，厚生科学研究子ども家庭総合研究事業平成11年度研究報告書「障害児の家族を含めた保健・医療ケアに関する研究」

⁷ 松本知圭，郷間英世(2013)，軽度知的障害者の特別支援学校高等部卒業後の就労・生活・余暇についての実態調査，特別支援教育臨床実践センター年報，3，1-9

⁸ 前掲書 4

⁹ 前掲書 3

¹⁰ 前掲書 7

¹¹ 前掲書 6

